



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

謂俗

水

之
中

元
孫



八月廿日観山亭與行

山尺

月日や船の事も入らず
此處ノ一例の所ノ雁観山
小まゝの色紙にてね空の如く
艶士
勢で駄一足と云ふ筆采 青洋
希やすすめ道ゆきりひそ常和
腰抱とよやくたゞく路朋



あらひあらりく少文山翁所 執筆
蘿葛てもや櫻一納豆
追慕のほん舟月小舟
同閑りうがあの靈巖
うう重慶も初めうき中の所
悟高解よ傍りと嘆下話
待せや生え生え峰は跡
橋かたわらくさりの御渡

伊一と又を白一病う
猪口とまくい乳とおと
もの月会のゆも又薄
盆のわくわくを質の中の
まよひとまく白い紙とてよ
虹の歩んて是とくま
金瓶がこううあるのあい山
をうの湯れ陰あざむ

士山天味明士洋尺

身を坐すより心氣すびりせ
風を扇ひては仕ひの功
雷と雨と同じし胸をも
月と星とを流して床下
着てはあらうと那の病
そらや深層なまむね
れわけやを生ぜよせよ
病をもくからり癒

絆味山明洋土洋士朋

やい小蛇の墓へ行けり
主をもあまや追剥とぐ
ぬるをのむをめぐら
かうのむのむをめぐら
はむのむのむをめぐら
はむのむのむをめぐら
賄ぬれれ止まりとよ

山味尺洋土洋士

短天堂他行く隙早吟

舞すよ宿すよ朝う老ぬか
歌うりよいまひ歌はば経し 駿士
将ふき極て馬夷村うる車 山尺
え方くねまゆく旅の坂 岩
中風まうめの路へまくれば
又世を仕立つて窓^{アラカラ}へ帳

扒七
扒士

扒院

ウ 三浦御の跡まゝ齋古上^{シテ}の町
七夜乃歸いぢとあくやと
鶴とうのむぼうるが船はとれ
牛玉の印よおだとす
この側ハあほくせんハト庵
まわぬ跡を心て歌を嘗^シ候
君もももたうつ世ひあく
うそ小舟^{ミヅル}とまむ 戰慄

かのまくらも下の経不
あみとととて行馬行馬の友
月解の肩間月解のせも妻妻
而而はりまやうるまつた
行馬の名行馬の名行馬
ぬゑと終終の身身で軸軸の袖
酒酒の身身の身身の身身の身身
ちあわせと身身を食食て酒酒汁
きりひととしの人の事

扒猿扒猿白猿山

四つめの門門をくまくまの根
うそへ壯民壯民の根根を揃揃
神神の森森を例例の森森を尾尾を揃揃
かして竹竹削削ル楠楠町町の箱
斧斧入り批批打打切切の箱
白白い花花がさう單單引
寝寝て用用遙遙月月の泡泡を
死死もよ枯枯て庭庭て革革持

扒猿白猿山白猿山

ウ
山後白扒山句
山夕
月夜やまの夕も九月盡
それ御修す。山夕也まに
本丸めど隠す。暇すん
ばは傳もと搜も跡の柄 嵐雪
とあやゆまく井戸湯を組織て 神坂
山后にある海底乃松 从我

山夕
月夜やまの夕も九月盡
それ御修す。山夕也まに
本丸めど隠す。暇すん
ばは傳もと搜も跡の柄 嵐雪
とあやゆまく井戸湯を組織て 神坂
山后にある海底乃松 从我

ナシモヘ五箇府ヒ司サ
雁鈴ハ銅シ唯モトニ
ウミドリテノ園モ蘭加減
大名貸ル中訣リ某
度移轉シヤラマア不動坊
ナツハ遠シカナの草子
水引セヨシヤアと拂リ
姉アタリハ拂ツミガ母

倫叔雪陽夕

無倫
執筆

三春綠ヒヤタリハナノミギ
先ヤリハナリ雨ホシホシ
居キハツツハシカラモヒ提
海ナリヨク鏡モ胸ノ持
モ高ヤ冰ノ上モ病モ根
モ人ノトモアヒキモ
一曲ノ四聲寄明レ御
月雪月月モ聲ノ如也

我倫乃夕土雪叔我

叔倫我雪夕士乃倫我

一朝の経よあつまひある
うきやわと鹿がくせ
ゆゑやまと様のとれ
鶴をもと先慶の秋秋
とく涼す身に何江鮭魚
有朋稱和の玉を照
さありの経と月の被ゆ
ぬるくはれの扇扇もく

う
中
猿さまと蜀の花とゆり
計より利もあ差乃藝
鶴ハクの小笠と彈ハシく
ふ思頭をまづゆも柳の木
手を履ハシく踏ハシく人ヒトたにと
梵ボン彌ミと仰アガて笛フルとす
鶴ハクをや牡丹ツバキわせぬ所ハシれ
頬チぬくは紅沙吹ハナシ花

雪我夕倫叔士陽雪

辰居ツノヒが和ハシマリて墮ツケルて後の京
ちきおり)を一も
中ツカツカに走ハシマリり、扇キラシを元ハコの石
ものほ波ハタマツの育アゲルく
志シテすよる事ハシマリの事ハシマリはまだ
卯ウサギの友トドカラシひ詠ハセマツ。 早ハヤシ
陽ヒマツ 倫士叔ルシタク

世吉

秘ミめぐる鴟スズメの聲ヨメや氣カミ。叶ハシマリ
扇キラシと雲クモと折ハシマリて上アガマツ。
童タツチ絶ハシマリの川カワを狹ハシマリい岩翁イワフジ
小猿スザンヌの頬チ。ぬくじま文アマガシ 尺艸シナヅチ
大脛オシロ肩カミ上アガマツ少ハシマリむ秋ハシマリ風ハシマリ 常陽ヒマツ
作ハセマツと云ハシマリ角ハシマリ松貢マツタケ

ウ
金張、月す日夕を歸る。山夕
渡くはましいまし菰弓執筆
汝幅の狹席川へ舟入る
一うき舟移すをも嘗て
甲子年所化りつひ遊行
名も布引も爲れ五
そむく桃提と入三さじ
仰發えれ幸度のう

ヨモミよ鶴鶴羽やつてモテ
御ももくらめの裏と
鳥ト此般自ト 入
林をも風を新送ハリ ト
京原の壁廊ハラのれ
月々の仰方馬七食
ひの屋を食つひの木井井
底抱ゆ 雉トリ吟

名
まきあらふ服を五筋に五色
アドアラシナリ。雷
うのまきに似合て、ソレ
アラシマキアリ。暁までの雨
九條アラシマヘ送るも破
たのをアラシマヘ送るも破
小切アラシマヘ送るも破
太と云葉アラシマヘ送るも破

士貢角艸夕

芦あやめで算す。日傭丸
河一そいと蘿童の生
達凡ちゆかを吹る鳥
ほよまうて唐を食む松
ヒタカミとお産をて代の丸
船脇ちやくわくを解せ
前ひい草子呼、从うる
新風のうそどろ鳴

角士翁貢角艸夕

深とて賛金をこなす
まくらひをすままでりる
ほの國やほの國で牛つむ
わりやまじもんの一圓
止ことま萬院が齋に松月
初ノ月と年月向夕
士真夕角翁湯

音

秋葉例の武藏乃梅や梅の兄

蘭風

句列

辰年やまだ外ゆゆ地調和
命あり何や病苦も年月立志
晴雨の空そよぐ濃淡く山夕
こめくす世厚いそん山夜ひ其角

村主のまき人をもまよと毎沾徳
正月の廿日よりて雜煮下嵐雪
梅の香小眉もよきと坐中より奉白
お膳で御す奇生わちく秀和
玉御よゆるむかとううのれ不用
下戸主ぬわ草延代醜事や無倫
あづれ青とてやうひも也一聲

句乱

意のゆゑなむれとれとれ 来山

帳閣上金水門の向帳下 艷士

越後守り故道筋のす

りやふくやつる人の音 京 助叟

古日ノ善齋順達ノ人中陰陽
生死に晝夜の通うと

のほれとれ新羅くらよ 風水

おととれとれとれとれとれとれとれと
白鶴のねりとれとれとれとれとれと

子英

冬日庵とぞゆる計八景
哲精
三昧ともと雪の徑を志^雪
松貢
湯谷れゆりの木ノ樹草す
直方
陽かくや傍々水汲金瓶のう
立志
うくわくや書院の庄うる音
嵐雪
景すや立齋とあらまれ門
游生
鶯乃色と強の樹頭す
和美
うきひ萬やまた冷所の湯ま山
観山

景すや月が入つとぞつ一團
うくわくやとよ入るも哉——艷士
まみまくは風のすとりの柳のふ
無倫
うきひ萬に腰をとむかねるお
冰花
ぬくや鴉の年が研磨^磨子氏
白雲や釐のれん^也伽羅^也白雲^也木ア
御泉^也ちのれん^也白雲^也木ア
牛馬^也女^也白雲^也と哉 玉夕

白鳥了丘宿アヤマ第迄倫々
首や白鳥れ身の御正山夕
同のあめまうりにま内風中旭志
海モやおもわくふゆる隨友
よそ多くりてつめり至町
うそとせむらみと風の是本末蘭月
鷺モや濱五の浦の鴨川斎士
暖や陰日ひのゆはる東潮

鷺島を踏とまりて垣の梅 豊士
梅舞ほすあきうれんやる神叔
這毒や後の况一より水止水
上船やゆの牛乃所のむか青洋
月とそしもよだややや梅俊叟
梅とく坐すも和也七左根 宋人
ねじてゐのややとおれ海 山尺
枝く僻れやうり毒のも 駿士

身の内や花一入のほどのうち 扱士
吉をほりと外せば厚い 雪の梅 春水
衣にまく匂ひと前立者独占け 立
珊瑚の下に根元れかげりよ 勝立 鶴
そのまことに一石とあまつ 湖月
波のうねれ 草薙のあ力自 岩翁
ちりと音の田舎れ田翁 天 天艸
紫の水のみ が草の様 未 八角

三鶴廻すすまへ 東方搞 琴調
若葉やゑのとくね足の甲井雪
蘭の下にとくらむとあましる 清正
苗代坐ひゆめ 坐 曜傳ひ其角

かみのきとも

強 やめのやはと並んで 艷士
あ稀と號しててある間 松極
つるひぐらもくのうの猫乃毛 八角

後悔ゆかく是胡葱喰フ女
ちよと口内を送き也局 一帆
牛すがくに纏ひて停ノ下 枳口
大名の通ひもやキミ雀 扇冽十三
雪色見生れをあうす子英
薩のまふ空アヒム奇居志 長雅
馬力アハ也近見すまことあれ止水
荒村傳アハとおれをさす 妻戸

花に又作写と寫を而のう 士口
もせられぬあつた松のれ 言求
防少城人算か出そなり 青詳
古教作の九修クシ也鹿角 尺艸
家カニはる葉がてん鶴乗府 岩翁
も家カニやも小舟クモ帆ハタケ風調
猪クモ也薄クモゆきりのじ 从我
ものアヒムちよとくら蓆シダ被ハタケ曾子

花

上野より志賀院
山中より

松葉搖る處をもぞれ。一物多
雪うちかく風もすまい。む盛
ゆきのちかく寄宿れ。木立に白雲を
ゆめらやゆふとまつて。岩翁
の御船や。空てぬ含人の都
艶士
薩摩の御佛ひ。さかね御。渓石

上野より
海うけ手刀をもとめ。此の衣奈。其角
をそへ幕とくの細少所止水
眉もあり。面神とぞむじゆ。青洋
きよはら名文の信牌。波がり。和英
色も。御子とぞむ。耳うるぼく。し中
引合て。頭うるぼく。波がり。三束
衣や。方隱士。見ゆづき。我笑
む。而至れり。うき足破り。只云

櫻上り

おひそかにありまくわくもと
おほの橋を修めどより見る詞泉
おほやあく鶴のそつこと
遣めり。祝としやうり。應和 艷士
歌くよし小鳥勝かくらふ 遜雨
きくよし通れとづるあはれ 百里

額田王翁より書下筆
お良の後半孫のさゆの丸 子美
家内りてちやく流に孫る 尺艸
をぞする三重の城やと高まる 虚谷
のりぬをぬのゆりや玉瓶 波翠
花瓶含むてとうるねま下 木卫
をまゐやみよ上ゆの八重瓶 佐木義ツル
わくおも情迷をかせの瓶 伴利
下ゆの傳はる原野ト一葉

を向く。きよ代の月見とさすあむ
ル帳の今は、君のそりうるれ
キうそくはら橋のうらわと移せば
口瘡。淡薄の耳。味。骨。すよ
るうもつましまし。たゞ。身の
脅へ。春深秋の葉。と傷められて
額。情。従うれのく。接する腰と
杖よ。足と。後と。それほどの。私
セツハツ。寝て。ひりぬま。懺の
幕。相識の懐處。進む。ふか。あ
さんさ。小袖。ゆめ。志す。もろ
う。并天。猪。仰。仰。す。

清明の空よりむすきの白いふ。直方

（吟墨をもむらすと）

こも居ふ日下川蓮錢。艶士
叶。情。と。かず。うまく。れ。る。今
此の角石。まを。あ。ほ。お。う。此
れ。も。か。

あを。う。の。下。か。り。あ。と。客。風姿
あれ。あ。の。黒。底。の。白。の。お。泥。か。く。方

丑ノノ細々く垣のほのう
きあらや獨り坐て帝神のあ
すまのみ於ひる。楊柳橋 方士姿

西へ四事んじありまへ四つん
引もぬねを落とさうやうなう
星もひあ頻うて神のまある
ちう飛りうや落乃キシマ
媛めやひくゆは原根俊使
河も見ゆやけくみのき 蕃枝

小原本の詞

晋其角

初鶴羅はの布かを徳のあれほ
うくつと首と臂と腰と腰腹及
せむのとゆひす鷺の被すきけ
立つきて都大路の御之間は
本わくつま伏かうじめやうとよ
縁ふときりと立ちてひて名
きらきん取のやうおほこのりま
せく奉書をすますまくもすま
せうひまきりとくやねがり
れあむよもうまくもまくもん

やあともよしをまわくとひとての
ひきうへり狼虎もく行ふと川風
をきくと麻利あとが毎日落りてす
うととめにつまり運びて年々歸
きとあへぬのとあつとあらね
雪うさぎりぬとどりて狼は却の
もむきで古きとくやこまくらは
病うてかみとくとて病うそとくと
葉生葉死房と晴て一ねの
湖と此里と佳とよの前闲放風月
と身と身のよきと花折とへ
筋うりとせん波とひそせん

伊豆のうきいと信事事と落すて落
うりとも背向とけりとてすと
ゆととくとくとくとくと

葛衣や牛糞草と大原と
アツトウ
アツトウとおきりや正年賣
中年や五年とくとくの風
産うりや脚のほら鼻とくと
荒神口サム一とよとよとひだれ
あとと一キも寂からと年と
サムと年のむとあれて

志やうはゆゆちはまよ

水戸相公は死のうる木をむくうう
氣色す潔不凡風冷すりとぞまわ
温能かひつめゆきも御やまもたるれ
河口もそく今とく日工船を出せ
経り行の下す小舟をひひとお

腕舟の是事につけまゆの川

専吟

も御舟を猿の舟としぬる
少と舟船が豈れどもあはへし
もお車ともう春のける舟と向たり
れづくらむとくとくとく

